

私の京都新聞評

土居 好江

啓蟬の3月6日、朝刊1面には「春の香り ミツバチも誘われ」の見出しと早咲きの桜の写真。紙面一杯に春の風が吹いてきた。緑あふれる自然環境でマウスの寿命が7%~17%伸びたことが、国立研究所から昨年発表された。おそらく、人にも当てはまるであろう。都会では、土の匂いも風や葉擦れの音も感じられない環境で、身も心も危惧される状況だ。

銀閣寺にある錦鏡池の座禪石や弁天堂は花折断層の地震を鎮める



外国人を案内した。花の美しさに魅せられ、そこから離れられないように見入つて感動された。私たちも毎年、当たり前のようないくつかみしめた。

桜は『古事記』や『日本書紀』には木花之開耶姫と記載されており、野山に美しく咲く桜を「さく

らためてかみしめた。院の田中眞澄住職は「木を抱いて耳をあてれば木の心臓の音・水脈の音がする」と語る。農薬を使わない山の手入れで、水も空氣もない

桜から京の文化を思う

や」と呼んでいたが、「さくら」に変形したと伝えられる。普段は山に住んでいる神「サ座」を「さくら」と読み、山里から人里へ降りて桜が満開になると、田植えの時季を教えてくれた。更に桜は見る人に語り掛けるように、下向きに開花する特性を持つ。

3月25日朝刊の第2社会面(26面)に、日航ジャンボ機の墜落事故現場「御巣鷹の尾根」を管理する男性が、同事故を追悼する目的で植えられた桜をめぐるため、石山寺を訪れるという記事が載つ

た。戦国時代、桜は「死人花」と呼ばれ、合戦で亡くなれた遺体を良時代から母なる大地への敬意を漢字で表したのかもしれない。この春、初めて日本の桜を見る木にもそれぞれ歴史と文化がある。自然と調和することを願つて京都人の想いと感性が継承されてきた。この志や感性が継承することで、文化の継承そのものだ。

鴨川の水源地にある岩屋山志明院の田中眞澄住職は「木を抱いて耳をあてれば木の心臓の音・水脈の音がする」と語る。農薬を使わ

ために中世に置かれたとされる。自然と調和するために、お茶の井泉は断層沿いにあり、人間が自然に働きかけた珍しい事例だ。しかし、当時は当たり前だった。太古、人は東から昇る太陽を押し、一日が始まった。南に向いて最初に太陽を浴びる東側が格上の場所とされ、京都の雛人形はこういう歴史的な経緯で、向かって右東が男雛となつた。

太陽が神聖視された時代から、長年に渡り、今まで天皇の

京都はこの異空間と異空間がせめぎあつてできている。今一度、京都の置かれた環境に想いをはせ、今後も見守り自然へ感謝したい。

(京すずめ文化観光研究所理事長 次回の土居さんの評は5月12日に掲載します。)